

本と社会

「人文ネットワーク」ニューズレター
2006年3月10日 第12号

●発行元 人文ネットワーク
●印刷 (株)新栄堂 ●編集制作 (株)新評論編集部
●事務局 (株)新評論編集部内(担当:吉住)
〒169-0051 東京都新宿区西早稲田3-16-28
Tel.03-3202-7391 Fax.03-3202-5832
E-mail: yoshizumi@shinhyoron.co.jp

人文ネットワークは、読者・著訳者・編集者、さらにできれば書店・印刷所の方々とも連携して、我が国の人文書出版の現実、すなわち、単なる利便性や拙速性や広範性の中に腐心する本づくりの現状を批判し、その現実を改革しようという会です。私たちは、人文書が構想され制作され流通する現実のプロセスの全体を視野に収めつつ、特に制作プロセス、本づくりの現場に注目しながら——つまり我が国の出版の社会的現実における個々の人文書の具体的生産現場と切り離すことなく——、定期的な読書会を通して一冊の人文書を読解します。それは、人文書の内容の読解と、その社会的な現実存在の理解との連結です。当ネットワークは、本づくりのためにではなく、自らの本づくりのあり方を考え改革するために、まずは著訳者と編集者という当事者同士が出会う場として設定されました。私たちはこの作業を通して新たな現実的知性の発見を目指します。このニューズレターはこうした私たちの活動の一部をご紹介します。

白石嘉治氏に聞く —— 『ネオリベ現代生活批判序説』刊行にあたって

◆インタビュー：人文ネットワーク編集部

人文書とネオリベリズム



しらいし・よしはる 上智大学他教員/17世紀フランス文学、当ネットワーク会員。昨年10月、同じく当会員の犬野英士氏(19世紀フランス文学)と共編で『ネオリベ現代生活批判序説』を上梓。当ネットワークでの「人文書と社会」をめぐる議論のひとつの成果といえるこの本の核心と、出版後の反響について話を聞いた。

●白石さんにとって、一言で言って人文書とは何ですか？

人文書とは「不純」なものですね。動機不純とか、もう死語なのでしょうが、不純異性交遊なんているときの「不純」です。

もともと人文学じたいが不純です。この『本と社会』11号でもアラン・ド・リベラの議論(『中世知識人の肖像』阿部一智ほか訳 新評論1994)に少しふれたことがありましたが、人文学は神学からの離反としてヨーロッパ中世で発生している。

当時の人文学的な営み——もっぱら古代の文学や哲学の文献を読み解くことですが——は、より正統な神学への準備段階として位置付けられていました。でも、文学や哲学を読むだけでいいという教師や学生がでてくる。古代の文献といっても、キリスト教サイドからみれば異教の怪しい文献です。それを享受するだけで自足するわけですから、いわば流神的な営みだった。ですから…

●ちょっと待ってください。それは中世ヨーロッパの大学での話ですよね。何百年も前の遠い外国の話は、人文書の現在を考えるのには距離がありすぎるように思えるのですが。

まさに問題はそこにあります。何百年も前の遠い外国の話。中世人にとっても、古代の文献はそういうものでした。他方、当時の神学は現実を理解する唯一の原理ですから、きわめてアクチュアルなものです。

つまり私たちの言う人文学の契機には、二重の「錯誤」が含まれている。時代錯誤と地

理的錯誤です。その意味でも、人文学ないし人文書は「不純」なのですが、そこには人間とは錯誤を生きるものであり、その「不純」な生そのものを無条件に肯定していくという賭金がある。

考えてみてください。今はネオリベリズム(新自由主義)が社会を席卷しています。これは市場原理主義ともいわれますが、要するに一種の純粋さへの志向です。だから市場という規範からはずれるものは、薄汚く理解不能な不純物として蔑視し、「負け組」などと呼んで排除していく。

ここにあるのは、『ネオリベ現代生活批判序説』のインタビューで岡山茂さんも言うように、「一神教」となった資本主義の姿です。あるいは酒井隆史氏の書評(『読書人』06年1月6日)の表現を借りるなら、「現実を継ぎ目のないなだらかなものへと自明化する」「完璧なイデオロギー」といってもいい。

●つまり人文学や人文書は、そうした「一神教」や「完璧なイデオロギー」の純粋さへの抵抗としてあるのですね。『ネオリベ現代生活批判序説』の本論が四人のインタビューで構成されているのも、「不純」な人文学的な実践ともいえるのでしょうか。

『分裂共生論』(人文書院)の著者でもある杉村昌昭氏が『図書新聞』(05年11月26日)に長文の書評を寄せてくださったのはうれしかったです。じつさいインタビューした四人には現実的な接点はほとんどないのですが、人文学的な不純さがそれぞれに備わっているからこそ、「分裂共生」が可能となったのだと思う。

人文書を読んでいるときの感覚を思い出してください。遠い過去の話が身近に感じられる。時間と空間の正常な遠近法が破綻しつつも、世界の一端にふれたというある種の信を

獲得することができる。その限りにおいて、人文書はネオリベ的な純粋さに抗うものですし、本書が大学の問題を出発点としたのも、人文学的な教養を培う場として、大学に抵抗の拠点を見出すべきだと考えたからです。

いずれにせよ、小説家の保坂和志氏も「教養の力」と題された文章で本書にふれながら、こうした錯誤をはらんだ人文学的な営みによってのみ「世界を予感する」ことができるといっています(「途方にくれて、人生論」Web草思)。この「予感」がなければ、ネオリベ的な規範に隷従する他ないでしょう。本書が大学の無償化やベーシックインカム(基本所得)を、ポストネオリベリズムへの展望として掲げているのも、世界とそこで営まれている生を無条件に肯定するという、人文学に充溢する不純さへの根源的な愛とでも呼ぶべきものに寄せる信頼の表明に他なりません。

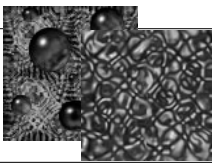
カバー図版：
ユウジ・アゲマツ
(アーティスト、ゴミ収集家/
ニューヨーク在住)
www.bordersphere.com
/yuji/yuji.php4

ヒトは何をゴミと呼ぶのだろうか？
ふと出会った地面に、ドス黒い
染みの跡を見る。
不気味な形状、異化された物体
の痕跡…
(「カバー図版」寄せてより)

2005年 新評論刊
四六上製 264頁
2310円(税別)

『ネオリベ現代生活批判序説』白石嘉治・犬野英士 編
[インタビュー：入江公康・櫻村愛子・矢部史郎・岡山茂]

市場の論理に包摂された我々のネオリベ(ネオリベリズム=新自由主義)化した日常的感性と、「生の統治」へと亢進する意味なきネオリベの教義を徹底的に批判する。編者と四人の対話者から「労働/消費」「心理/主体」「運動/政治」「大学/文化」の各領域から「現場」に依拠した反ネオリベ論を縦横に展開することによって、ちりばめられた各論が聖座の如く結び合わされていく。



2005年12月17日、秋津（東村山市）で行われた第38回例会は、『ネオリベ現代生活批判序説』の編者白石嘉治の基調報告をうけ、今日の状況と人文書のあり方をとば口に活発な議論が交わされた。参加者は、桑田禮彰、生江明、片桐祐、入江公康、出口雅敏、李鳳新（M.クレボン『文明の衝突という欺瞞』台湾版翻訳者）。以下は各人の発言要旨。（編集／白石）

◆人文書、あるいは二重の抵抗

白石 出発点に立ち返って、「人文書とは何か」という問いについて考えてみたい。

最初に確認すべきは、人文書は市場の論理に隷従して構想されるものではないということでしょう。たんに売ればいいというわけではない。

また一方で、人文書はいわゆる「専門書」とも完全には重なり合わない。専門書は規範的な制度を前提しています。

同じことは文化一般についてもいえます。文化は市場の論理によって完全に商品化できないし、国家の規範によって統制されるべきものでもない。『ネオリベ現代生活批判序説』では、こうした文化の位相の一端を、大学の問題として捉えています。

ネオリベリズム（新自由主義）が支配的な趨勢となるにつれて、大学が市場の論理にからめとられていく。このプロセスは解放的に見えるが、実はそうではない。国家のくびきにかわって、市場の専制が横行しているにすぎないのでから。

したがって、大学は、国家の拘束に抗うだ

自由と民衆文法

●蔵持不三也（早稲田大学教員／文化生態学）

このところ、ムハンマドの諷刺画掲載問題が世界的に大きな反響と事件を引き起こしている。むしろその背景に、9・11で一気に増幅した西欧社会の構造的なイスラム＝ムスリム差別をみてとることはたやすいが、掲載する側の論理は、いつに変わらぬ表現の自由。ならば、10数年前、映画『最後の誘惑』を、イエスをあまりにも愚弄したとして弾圧し、葬り去ったのは誰だったか。これを見ようとシャンゼリゼの映画館に入り、数人の観客（？）が撒いた催涙ガスでもの10分も経たずに退出させられた私個人の恨みはさておき、「自由」とはかくも恣意的な用語と神格化のうちにある。民主主義や国民といった語彙と同様、それはつねに権力の如実な装置としてあるのだ。今般上梓された『ネオリベ現代生活批判序説』は、市場個人主義としてのネオリベをそうしたものとして告発し、権力が操作する文法をもの見事に切開している。畏友渡辺公三の訳になる政治人類学者 P.クラストルの『国家に抗する社会』（書誌風の薔薇 1987／水声社 1989）を引くまでもなく、国家が言葉の論理を操作・篡奪し続ける装置であるなら、これに抗して、いかなる「民衆文法」が構築できるか。人文書が真に引き受けるべき使命は限りなくここにあらはす。

けでなく、それ自身が市場に抗する運動となる必要がある。このことなしには、大学が文化の生産の場であり続けることはできないでしょう。そして人文書もまた、同様な二重の抵抗を賭金としているのではないか。

もちろん人文書も商品であり、市場の論理と無縁ではない。また学術的な規範を等閑視することもできない。だが、人文書をつくる時、あるいはその読者となるとき、われわれは市場の交換原理や制度的な規範に還元できない何かを感じているのではないか。たんなる情報や知識の獲得と蓄積以上のものが賭けられているのではないか。

ネオリベ化した社会では、交換が原理的な規範となり、そこからはずれるものの存在はゆるされません。それゆえ大学や人文書は格好の標的となるのですが、その賭金としての言葉や世界は、たんなる交換の対象でもなければ、何らかの規範によって完全に捉えられる制度的対象でもない。だからこそ、人文書は大学と同様に、交換と制度（あるいは市場と国家）に対する二重の抵抗をとまなう運動として立ち現れるのだと思う。人文書という運動によって取り戻すことが目指されているのは、言葉と世界がたしかに存在するという、肯定の予感とも呼ぶべきものです。

◆文化とネオリベリズム

出口 大学や人文書のみならず、美術館、博物館、図書館等についても同じことが言えます。無償ないし廉価で使用できる文化的な施

教養の破壊ではなく（そして無償化を）

●入江公康（専門学校講師／社会学）

上の世代では、大学で教養を、というとき、そこに侮蔑が込められる場合があるようだ。おそらくは大学のもった階級性からそういうのだろうし、学生は小ブルであり、それは労働者に対する「負目」に裏打ちされているのだろう。河合栄次郎の臭い説教が何かのように聞こえるのかもしれない。だが以前のように、大学は「上流」の子弟が独占的に行く場所ではなくなった。いまや「全入」（これは留保付だが）が目前だし、大学をめぐる階級関係は変化している。大人たちの衰弱し切った文化の中に育った子供たちが、おのれの、他人の生を滋味深いものにすべく、ほかならぬ教養を求めているというのなら、どうしてそれを否定できよう。ビジネス書、企業誌、広告に溢れた情報誌その他、日々洪水のように押し寄せる干涸び切った活字情報を浴び続けていよいよ本当に気が狂う。資本の原理は教養の場としての大学を破壊する。じっさいネオリベリズムは破壊的だ。コイズミにせよホリエにせよ、そのようなものであったのは間違いない。そんなとき林光『私の戦後音楽史』（平凡社）を手にとった。首相がイタリヤオペラとX-JAPANを好きだというとき、やっぱり教養を破壊していると思えない。

設や装置が標的となっているからです。

ネオリベ化した社会のなかで、文化の公共性が毀損されているわけですが、その点については、若手研究者の仲間とやっているニューズレター『ヨーロッパ民族学研究会通信』（2005年 vol.2）でも特集しました。ただ、より問題の深刻さを感じさせるのは、そうした自発的な研究の場やサークルそのものが成立し難くなっていることです。まず院生たちが呼びかけに応じない。そして集まる場が物理的になくなっている。それはネオリベリズムが文化的な営為そのものを摩滅させていることを示しているように思われます。

◆古田とブルデュー

片桐 大学の教員のあいだでも、さまざまな問題を話し合う場を作れなくなってきました。語る相手がいなくなり、生きる場が狭められていく、というのが実感です。とりわけ語学の非常勤講師は、言葉と世界を同時に垣間見させるからでしょうか、ネオリベ化する大学では、物理的に隔離されてある種のゲットーに囲い込まれる場合もあります。

『ネオリベ現代生活批判序説』についていえば、ネオリベリズムの諸相が四人のインタビューから描き出されていますが、専門分野が異なるのはもちろん、それぞれが自律的な立場から共通の問題について語っている点に采配の妙を感じた。だからブルデューと古田敦也が索引で並んでいたりする。まさにブルデューの『世界の悲惨』（藤原書店、近刊）と同じ

ネットワーク

●片桐 祐（青山学院大学他教員／文学）

古田敦也とブルデューをつないでくれた『ネオリベ現代生活批判序説』のネットワークから、忘れがちな基本を教わった。すなわち、私自身がこの反ネオリベのネットに種々のネットをつなぎようということである。

最初に接続したいのは、12世紀のサン＝ヴィクトールから20世紀のアウエルバッハ、サイド、トドロフと連なる亡命者のネットである（ツヴェタン・トドロフ／及川頼弘訳『他者の記号学』法政大学出版局 1986）。私たちの世界全体を異国として見るような視線は、文明の衝突論が歓迎される時代にはとりわけ大事だと思う。

もう一つの接続候補は、19世紀ドイツの芸術ネットである。『ゲーテとベートーヴェン』（青木やよひ 平凡社新書 2004）は、両巨匠とそれをつなぐ夢想家の才媛ベッティナ・ブレンターノによる小規模ネットを伝える。反動的な帝政下で果敢に橋渡しを試みる、ほとんど闘争的ともいえる彼女の行動力は、私の懦弱な心を鼓舞してやまない。

ところで、後者の本の筆者は名だたるベートーヴェン研究家だが、同時にまた、女性学の理論家、実践家として長いキャリアをもち、フェミニズム・エコロジーの熱く力強いネットを築いてきた。あとは私自身が「適切に」接続をするばかりだ。

ポスト・ネオリベラリズムの展望

ように、こうした本をつくること自体がひとつの運動なのだと思う。



座談会の模様(秋津吉番館集會室にて)

◆社会学者の犯罪

入江 運動の感覚を社会学者が見失ってしまったことが問題なのだと思う。その意味で、社会学者は犯罪的。

かつては国家と市民社会のあいだには断絶がありました。だが、現在は市民社会そのものが市場化されてしまっている。市民社会を解析する社会学者が、こうしたネオリベ的な事態を追認しつつ促進している。

そこで蔑ろにされているのは、『ネオリベ現代生活批判序説』でも強調されているように、当事者性であり、その源泉となる教養を形成する場です。社会学者はけっして教養があるわけではない。彼らは現状について饒舌に語るが、その言葉は根こぎにされカサカサに乾いている。社会学者がなにより当事者として批判すべきは、生涯学習などと称して教養を金で買えるものにし、本来無償で教養を形成する場としての大学を破壊しているネオリベ

的な現実であるはずだ。

◆翻訳と連携の可能性

李 ネオリベ化した社会のなかで、当事者性が稀薄になっていく。このことと公共性が毀損されていることは密接な関係があります。なぜなら、ひとが真に公的でありうるのは、当事者であるときだからです。

じっさい、クレポンの『文明の衝突という欺瞞』日本語版(新評論 2004)を台湾語に翻訳(果實出版 2005)するという私の試みは、さまざまな連携によって実現した。このプロセスには、当事者としてパブリックなものを担うためのヒントがあったと思います。『ネオリベ現代生活批判序説』は翻訳ではないが、大学問題の当事者として出発しつつ、インタビューを重ねながら問題を公的なものへと開いていくさまには、私が経験した翻訳と同じ連携の可能性を感じます。

◆個別性と全体性を取り戻す

生江 ネオリベラリズムは特定の世界了解の仕方です。ひとびとの「全体」性は解体され、数値として評価できる「部分」に切り詰められてしまう。評価されるのは計算可能なものだけであり、それ以外の負荷の排除によって利益を最大化しようとする。

じっさい、ネオリベ的な手法が「エンドユーザー」を尊重するといっても、ひとの話を聞いていません。それに対して人文的手法は、相手に対峙して自分自身を問いただしてい

く。そこには個別性と全体性を同時に取り戻していく契機があります。それはマニュアル的なものの対極にあり、日本の社会が抵抗なくネオリベ化しているとすれば、均質なものを求める軍隊型の社会への危険な志向が潜んでいるのではないのでしょうか。

◆ネオリベ感覚の核心

桑田 『ネオリベ現代生活批判序説』、限りなく現場に接近しながら没入しない方法的緊張と、読者に向かって決して強制せず同意を促すという共感的な倫理的センスが魅力です。ただ、あえて言うなら、現場での格闘をもう少し突っ込んで描いて欲しかった。現場の「現場」たる所以である「具体的解決策を発見せよ」という至上命令の圧力の中で、議論し説得の努力を重ねていく「誠実な」プロセス、「公正」たろうとするプロセスがネオリベ化する危険に触れてもらいたかった。

たとえば、「冬の時代」に入った日本の大学は、「入学定員確保」の至上命令に従っている。そこに利潤の追求のみではなく公正さの追求も発見しなければ、ネオリベ批判は皮相になってしまうような気がするのです。大学は、願書受付時の受験生との契約を遵守し、たとえ学力の劣る者ばかりでも「入学定員」分は受け入れざるをえない。「不合格者を出す定員割れ」は不公正であるという「常識」が日本の大学を蝕んでおり、この「公正さ」感覚こそ、利潤追求を支えるものであって、ネオリベ感覚の核心ではないのでしょうか。

ネオリベラリズムというカフカ的世界

●土屋 進(中央大学他教員/現代思想)

環境世界の中で生きていくために、人はそれぞれ独自に、「自然/社会」「意識/物質」「自然物/人工物」の錯綜した統合体である「生きていく地平」を構成する。グローバル技術は、この「生きていく地平」に大きな変貌をもたらした。それは社会的空間を「地域」から「会社」「会社」から「ネット空間」へと基調を変化させるだけではなく、知覚場という深層においても地殻変動を引き起こすのだ。実際この技術によって、身体は重力(日常知覚を決定づけてきたもの)から解放され、彷徨い始める。激変し不安をもたらすこの「生きていく地平」に、ネオリベラリズムは経済的合理性という新しい領土線を引く。生きて行く基軸地平を求める人々には甘いお菓子だ。しかしネオリベラリズムが語る「合理性」とは、多様な個人の「生活の地平」が接続して作り出されるものではない。経済効率というその「普遍公理」は、実際には個々の「生活の地平」を解体し、意識の内部を一元管理し、ファシズム的な身体を作り出すものだ。カフカはこのような非在の場を作り出す身体性を「掟」(池内紀訳『カフカ小説全集』白水社 2002)と呼び、そこからの出口を次のように囁いていた。「掟とは、存在せず、ただ私が関わりをもつことによるのみ具現化するものだ」と。

明るい教訓

●出口雅敏(早稲田大学人間総合研究センター教員/文化人類学)

〈〇月〇日、『ネオリベ現代生活批判序説』(新評論)という本を頂戴したので早速読んで、授業でも使った。「貧乏は貧乏人の責任」と題して新自由主義の考え方を紹介した。あえて肯定的に紹介し、批判は学生にまかせた。反発は必至と予想したら、これが大ハズレ。講義後に出させたレポート(感想文)には「先生の言うとおり」「ネオリベに賛成」の声多数…。

先日、敬愛する先輩がやっているブログに上記の書き込みを見つけ、苦笑した。でも、含蓄もある。ネオリベに賛成か反対か、で挙手を取る二者択一的な図式は発端にすぎない。むしろ、細心の注意と精力が注がれるべき局面は、討議をし、一致点を見出そうと工夫する、具体的な問題解決の場面や現場で生じる。例えば、『都立大学に何が起きたのか—総長の2年間』(茂木俊彦 岩波ブックレット 2005)には、東京都立大学等の統合再編過程の具体的経緯が報告されている。ここでは、一つの実事として、都庁が初上で考えた当初の「構想」は結局修正せざるを得なかった状況や、その具体的修正の圧倒的部分は「現場の当事者」である大学構成員(教職員や学生)に頼らざるを得なかったことが指摘されている。明るい教訓だ。「現場の当事者」には秘める力があり、その力は、己を消し去っても相手の中に甦るのだ。

ネオリベは直線を目指す

●生江 明(日本福祉大学教員/社会開発)

ネオリベとは、実は近代化のキャッチアップ手法そのものの中に埋め込まれているのではないのか。堪え性もなく、おのれの欲するものへ一直線で進むことを最善とする思考パターンである。それを妨げるものは敵であり、排除すべきだとする思想。ネオリベが戦争を好むのは、戦争は敵の排除を正当化するからである。ポスト冷戦の時代となって、かつての左右勢力は効率という直線を正当化する合言葉でひた走る。英国において、サッチャー政権からブレア政権への転換の中で引き継がれたもの。それは、ニートや長期失業者を、「就労者」や「労働者」という左右両翼の正統概念(市民社会)の外側に位置付け(「アウトクラス」!)、社会福祉の対象ではなく取り締まりの対象とする「社会的排除」の合理化・正当化である(岩田正美・西澤晃彦編『貧困と社会的排除』ミネルヴァ書房「講座・福祉社会」第9巻 2005)。この排除の肯定論理(「余計者」カテゴリー:Hアーレント)は、ネオリベが社会を根こそぎ分断する手法と言えよう。デジタル化した分類線への沈黙の隷従が社会をネオリベ化し、排除される側に回る(負け組化)を恐怖させ、慌しくこのモデルに同化すべく直線的に追走する。分類を拒む多様・多彩なヒューマン(=人文)という曲線を語る時が来た。



書評

『ネオリベ現代生活批判序説』
評者 桑田禮彰 (駒澤大学教員/現代思想)

本格的ネオリベ批判の開始——命名/生活/対話/教養

きわめて強力な亡霊が、いま世界中を席卷しようとしている。人びとは生活の中で、政治・経済・社会・文化などさまざまな領域における深刻な諸変化が、ひとつの亡霊のシステムティックな活動であることを薄々感じていた。にもかかわらず、この日本ではマスメディア等によってその亡霊の名前が隠され、人びとはその亡霊の全貌を統合的にとらえることができなかつた。亡霊は亡霊のままであった。

本書は、おそらく我が国ではじめて、この亡霊による全体的現象の広がりや射程に入れて、この亡霊に「ネオリベ」つまり「ネオリベラリズム (新自由主義)」と命名し、この亡霊との本格的な闘いの一步を踏み出した書物と言えよう。

この亡霊の強さは、全世界的・全領域的な広がりによるばかりではない。私たちひとりひとりにとってこの上なく身近なものである点にも、強さの理由はある。この亡霊は、私たちの日々の生活の中に、さらには私たち自身の心の中に——実に日常的で具体的な個別的判断を下すときの私たちの価値観の中に——深く深く入り込んでいる。

本書の主たる狙いも、「ネオリベ」拡散の責任者を特定・告発する点にはなく、まさに本書タイトルが示すように、「ネオリベ」が私たち自身の生活に深く浸透しているさまを具体的に明らかにし、自分の生活の根本的問題を批判的に思索し直すことへと導く点にこそある。「労働/消費」「心理/主体」「運動/政治」「大学/文化」という四領域と各領域発言者の選択の適確さ、インタビュー方式採用の効果などに加え、何より本書編集それ自体の一貫した「ネオリベ」批判の姿勢によって、この狙いは見事に実現された。

その姿勢は、二人の編者による四人の発言者へのインタビュー全体の多様な豊かさに端的に現れている。この点で本書のネオリベ批判は、従来の「反ネオリベ論」の扱い難いイデオロギー性(「敵」の炙り出し=自己正当化、問題の単純化、方法の硬直化など)から脱し、責任を押しつけるべき「敵」を炙り出すことよりもむしろ問題の複雑さを直視し方法をできるかぎり柔軟にして、現実にかぎりなく接近することができた。

このようにネオリベ批判は、柔軟で豊かな——そして、対話者各人を自ら固有の根本問題をより深く自己批判的に思索することへと導くがゆえに、各人にとっても第三者の読者にとってもきわめて魅力的な——批判的対話を行うことを通じて実現される。つまるところ本書が教えてくれるのは、このことに他ならない。

一体、ネオリベは画一化・硬直化・貧困化する。本書末尾で編者が、これに抵抗する反ネオリベ的な理念として提示するのは「教養」である。この現在のネオリベ的文脈において、「教養」はこうして多様性・柔軟性・豊饒性・批判性を含意することにより、今後、抵抗のための原理的理念として再び新たな現実性を獲得することになるかもしれない。

状況雑感

学生、パート労働、そして教養

『ネオリベ現代生活批判序説』編者 大野英士 (埼玉大学・早稲田大学他教員/文学)

国立で年50万円、8割の学生が在籍する私立では100万円を越えるという意味で、実質的に世界一高い授業料を払っている日本の学生は、就学期間中、おそらく世界で最も過酷な労働を強いられる国の学生でもある。しかも、彼らの多くは外食産業やコンビニなど、低賃金のパート労働で文字通り「搾取」されている。

夜10時から明け方近くまで立ちずくめで働き、数時間の仮眠の後、彼(女)らは大学の教室に大巾に遅刻してやって来ると、机の上に突っ伏して爆睡する。われわれ大学教員が相手にしているのは、全日制・定時制を問わず、日々の労働に疲弊し、知的な好奇心など持ちようもないところに追い込まれたフリーター的「勤労学生」である、といえは妄想に過ぎるとお叱りを受けるだろうか?

Arisanというすぐれたブロガーが、現在、フリーターが強いられているのは、人から「考え、抵抗する契機」を奪う単純で過酷な労働であり、彼(女)らは、いつの間にか「生きる意欲」すら奪われていくと指摘している (<http://d.hatena.ne.jp/Arisan/>)。増加するニート、引きこもり、ホームレス、リストカッター、自殺者。彼(女)らは、単に甘えた怠けものというわけではない。

さて、日本社会は、学生から「考え、抵抗する契機」「生きる意欲」すら奪った上で、果たして彼らに何を教えようとしているのか? われわれが『ネオリベ現代生活批判序説』を書いたのは「教養主義」へのノスタルジーからではない。「考え、抵抗する契機」「生きる意欲」を与えるものこそ大学が提供すべき本来の「教養」だと、あえて主張すべき時代にあるからだ。

人文ネットワーク 思索が開花する社会へ!

大学生協からの声

● 早稲田大学生協コープ
プラザブックセンター 永田 淳

近頃、多くの学生は「動機づけてもらおう」ことを望んでいます。もっと実務的な内容の教育を望んでいるようです。社会人大学院、オープンカレッジ、TOEIC…生涯教育。これを推し進めるように大学は研究を放棄して「企業」を呼び込んでいます。市場に高く評価される人間になることは、強力な動機として学生たちを惹きつけています。

しかし実は学生たちは「動機づけてもらおう」ことを望むように仕向けられているのではないのでしょうか。市場がつくりだす脈絡のない競争の中に封じ込められ、その中で評価を得るために否応がなく消費側のニーズを常に待ち望む、従順で融通性のある人間にさせられているのではないのでしょうか。

マーケティングが社会管理の道具になった今、それを拒むのは難しい。しかし『新評論』2006年2月号に書かせていただいたように)自分たちが何に奉仕させられているのか気づいている学生も少なくはありません。マーケティングの楽しみに抵抗しよう人は、やはり学生の中に見つけられるのです。



おすすめの3冊

- シル・ドゥルーズ/宮林寛訳『記号と事件』(河出書房新社 改訂版新装1996/初版1992 3262円)
- ミシェル・フーコー/藤辺守章訳『性の歴史I 知への意志』(新潮社 1986 2520円)
- パオロ・ヴィルノ/廣瀬和訳『マルチチュードの文法』(月曜社 2004 2520円)

書店からの声

● ジュンク堂書店
池袋本店 後藤祥子

日本のネオリベ化が進むのと比例するように、「反ネオリベラリズム」を唱える人文書の数も増えており、それらは地味ながらこつこつと売れ続けています。しかしそうは言っても、ネオリベラルを地味に企業家や投資家が書いたビジネス書の方がはるかに売れており、おそらくそれぞれの読者層はほとんどかぶらないと言ってよいでしょう。書店の現場からして、ネオリベラリズム志向の本と反ネオリベラリズムの本はたいてい別々に置かれています。そんなことも、両者の読者層の断絶に少なからず影響しているのかもしれない(などと書店の担当者は考えたりしています)。

そこで今回、ネオリベラリズム関連書籍を集めたフェアをするにあたって、反ネオリベラリズムの本だけでなく、通常は人文書売り場に置いていないネオリベラリズム志向の本もできるだけ置くことを念頭に選書しました。このフェアが、普段人文書売り場に立ち寄りすらないお客様を、売り場に引き込むきっかけになればいいなあと考えています。

おすすめの3冊

- 杉田俊介『フリーターにとって「自由」とは何か』(人文書院 2005 1680円)
- 渋谷望『魂の労働』(高士社 2003 2310円)
- 藤田堂生『潜入ルポ アマン・ドット・コムのと影』(情報センター出版局 2005 1680円)



編集後記▶2003年2月、イラク反戦運動の高揚期、「人文書による批判の契機、その信憑の回復のために」をテーマとする『文明の衝突という欺瞞—暴力の連鎖を断ち切る永久平和論への回路』(M.クレボン/白石編訳)の編訳企画が成立した。翌04年1月、フランス語原書に日仏双方の議論を加え出版。米国に隷属した日本の政策とその持つ文化主義への排外的傾斜を“人文”の側から批判するための本である▶しかし、この潮流批判に我々がより自覚的であるためには、もう一つの“人文”的作業が求められた。文化主義と新自由主義との連動性を明らかにする作業である。『ネオリベ現代生活批判序説』出版の最大の眼目はここにあった。編者、関係者による幾多の議論を経て05年10月当書は完成、今後議論はこの焦点をめぐり、より深化していくことだろう▶排除・画一・管理を条件とする効率(市場)中心主義の世の中で、我々が恐れをもって自覚すべきは、個々の生の現場における個々の“当事者意識”の解体ではないか。排除する側される側、共にそうと自覚せざるころでも、いずれかの役を担い、担わされているネオリベ化した日常。これを他事と眺める感性が蔓延している。 『ネオリベ現代生活批判序説』編集者]